

国語 その一（八枚のうち）

次の文章を読んであとの質問に答えなさい。

（注）太平洋戦争末期、沖縄のそばにある沖永良部島に特攻隊の飛行機が不時着した。搭乗員の西島伍長*は、「カミ」（「ぼく」と同級生で十歳の女の子）の家に泊まることとなった。翌朝、「ぼく」と「カミ」は伍長と一緒にその飛行機を見に行った。

アガリヌヤーのウム畑のはずれに、飛行機がそのままあった。あたりはまだ焦げくさい匂いにつつまれていた。

西島伍長は翼に足をかけ、左側からぼんと、傾いた操縦席に乗りこんだ。

伍長はユニミ*よりも小柄だった。歳もユニミーとかわらないくらいに見える。こんな人がこんなに大きな戦闘機を飛ばしてきたとは信じられない。

「直せる？」

操縦席から下りてきた伍長に、カミはたずねた。伍長は首を振った。

「無理だね。もう解体するしかない」

その返事に、カミは嬉しそうにほえんだ。ぼくも同じ気持だった。飛行機が飛べないということは、伍長は島にいるしかない。三月に疎開船が鹿児島に行つたのを最後に、ヤマトウへの交通は途絶えていた。ぼくたちは、親しげにぼくたちの名前を訊いてくれた伍長を、すっかりすきになっていた。

「三万円の棺桶を壊しちゃったよ」

伍長は肩をすくめて見せた。

「上官からよく、おまえたちは三万円の棺桶で葬られるんだからありがたく思えと言われたんだけどね」伍長は飛行機の落ちた畑をながめた。

「畑をこんなに荒らして……申し訳ないね」

アガリヌヤーのウム畑は見る影もなかった。柔らかに夕がやされた畑は飛行機の機体に沿って押しつぶされ、夜ごとに手探りで植えつけたつるから実をつけ、太りはじめたばかりのウムは粉々に砕かれて、白く散らばっていた。

このウム畑は、もともとは百合畑だった。

暑くなると、島中で真っ白な百合の花が咲いた。そのころ、えらぶは百合の島と呼ばれていた。アメリカが一番のお得意先だった。戦争が始まってからは、アメリカに輸出できなくなり、食糧増産の掛け声のもと、みんなして百合を引き抜いては、ウムを植えた。なおも畑の隅などで百合を育てていた人は、国賊とかスパイとか言われた。

それでも、ぼくは戦争なんだからしかたがないと思った。あちやが徴用されたことも、ユニミーが召集されたことも、ウムやウムのつるを供出することも、一番のお得意先だったアメリカと戦うことも。ヤマトウと船の行き来ができなくなつてからは、はじめにマッチがなくなつた。ヒタネに灰をかぶせて

*伍長……軍隊での階級の一つ。

*ユニミー……「ぼく」の兄。島の守備隊に召集されている。

国語 その二（八枚のうち）

絶やさないうよう、あまもあやもいつも気をつけていた。

それから、石鹸がなくなった。ハイビスカスの葉を叩いて出したぬるぬるした汗や赤土で髪は洗ったが、あちやたちの髭剃りはどうしようもなかった。ハイビスカスの葉でいくら顔をなすっても、剃刀をあてると痛くてたまらないという。戦争なんだからしかたがないと、髭をのぼす人が多くなった。あちやもカミのじやーじやも髭をのぼしていた。

戦争なんだからしかたがない。

しかたがない。

イチミ*の葬式（兄さん）のときに、カミのあまは、トーグラ（台所）でそう言った。うつむいて、炊たいているたさんのウムをみつめながら。まるで自分に言いきかせているようだった。

そう言うって、ぼくたちはどれだけたくさんのをあきらめているんだろう。

カミが、足許あしもとに転がるウムのかけらを拾いあげた。白い根をのぼし、これから太ろうとしていた。

戦争なんだから、しかたがない。

それはぼくたちだけじゃなかった。

神さまだと思っていた特攻隊とっこうたいの兵隊さんも同じだった。

「すみませんって、謝あやまってたねー」

ぼくは伍長ごちやうに言った。伍長は驚おどろいた顔でぼくをふりかえった。

「ぼくが？ いつ？」

「運あやまばれてるとき。なんべんも謝あやまってたよ」

ぼくは、伍長ごちやうをなぐさめるように言い足あした。

「戦争だから、しかたがないよー。アガリヌヤーのおじいさんも許ゆるしてくれるよー」

「そうだね」

伍長ごちやうは考えこむように、荒あれた畑を見た。

「飛行機で飛んでるとき、下の声も聞こえるのー」

ぼくは昨日から訊ききたかったことを訊きねてみた。

「下の声って？」

「空襲くうしゆうで防空壕ぼうくうごうに入ったときに、泣くとグラマン*に聞こえるって言われたんだよー」

「地上ちゆうじやうにいる人の声ってこと？」

ぼくは頷うなずいて続けた。

「和泊わどまりで泣いた子の家に爆弾ばくだんが落とされて、おばあさんが死んだんだってー」

「それは偶然ぐうぜんだよ」

伍長ごちやうは驚おどろいた顔をした。

「地上ではそんなことを言うんだね。飛行機のエンジン音はものすごいからね。空中で編隊を組んでいる機同士でも、声は絶対に届かないから、手で合図あひずするもんだよ。まして地上の声が飛行機まで届くわけがないよ」

*イチミ……「カミ」の兄。特攻隊として戦死した。

*グラマン……アメリカの戦闘機。

国語 その三（八枚のうち）

ぼくはカミをふりかえって、わらいかけた。カミもほっとしたようにわらった。今朝のカミはよくわらう。

「きれいだね」

伍長が飛行機を背にして、海のほうを見た。朝日を浴びて輝く、とりどりの葉っぱの波は、海まで続く。

まだ夜が明けたばかりだというのに、その波間のあちこちから、朝の食事の準備をする白い煙が立つ。砂糖小屋の上がった茅屋根の下では、どの家でも働きものあまが、ウムかヤラブケーを炊いているのだらう。

カミはまた伍長にわらいかけた。

「空を飛ぶって、どんな感じ？ この島って、どんなふうに見えるの？」

「小さな島だよ」

伍長はカミにわらいかえした。

「手のひらで包めるくらい」

「そんなわけないでしょー」

カミはちよつとにらんだ。伍長はまたわらった。わらうとますますオサナく見える。

「空を飛ぶのは気がいいよ。初めて単独飛行をしたときは最高だった。家族に見せたかったよ。ぼくは空を飛んでるんだぞーって」

伍長の言葉に、カミは嬉しそうに頷いた。きっと、イチミーのことを思っているんだらう。

「世界は果てしなく広いよ。空を飛べばわかる。それで海があんまりどこまでも広がっているものだから、ずっと飛んでると、心細くなってくる。そんなときに島を見るとね、ほっとするんだよ。島って本当にふしぎだと思う。海の中にぽつんぽつんと、まるで、だれかが落としていったみたいに見えるんだ。ずっと、沖繩まで」

伍長は目を細めた。

「海に手が届きそうだ」

「海に行く？」

カミがわらいながら訊ねた。

「連れていってあげる」

カミは伍長の背中を押した。伍長は、うしろからカミに押されながら、歩きだした。

そんな甘えたカミを見るのは久しぶりだった。カミはお兄ちゃん子だった。ものごころついたときにはあちやが出征しておらず、イチミーがずっと父がわりだった。イチミーが島にいたころ、いつもカミはイチミーにまとわりついて甘えていた。

砂浜に降りると、なぜかぼくはいつも波打ち際に向かって駆けだしてしまう。

思わず五、六歩駆けたあとで、はっとしてふりかえると、伍長はカミと砂浜に立ちつくしていた。

「きれいだね」

伍長はウム畑で口にしたことをまた言った。それでも、海をみつめたまま、動かない。「どうしたのー」

19	受験番号
中	

国語 その四（八枚のうち）

ぼくは伍長のそばまで引き返してたずねた。

「まだ生きているのが信じられないんだよ」

伍長はぼくを見もせずと言った。

「すべてが夢なんじゃないか。ここは天国のようだ」

ぼくとカミは目を見合わせた。それから、伍長が身じろぎもせずみつめている海に目をやった。

最近浮遊物がないせいとか、今朝は砂浜にはだれもない。朝日を浴びた波は、きらきら光りながら、真つ白な砂浜に寄せてくる。島をぐるりとカゴむ珊瑚礁は、どんな荒波も打ち消して、おしとどめてくれる。水平線は真つ平らで、いつも通りの海だ。青い空にぽっかり浮かんだ雲が、カガミのような海面に浮かんでいる。

「それなに？」

カミは伍長の胸に下がる女の子の人形を指差した。

伍長は我に返ったようで、カミの人差し指の先を見下ろした。

「ああ」

伍長は人形のひとつを胸から外した。

「あげるよ」

伍長は人形をカミに差し出した。人形はきちんと白い開衿シャツを着て、紺のもんぺを穿き、頭には日の丸の鉢巻きを締めている。

「いいの？」

伍長は頷いて、砂浜に腰を下ろした。ぼくたちも伍長をはさんで横にすわった。カミは人形を両手でそっと包んだ。

「ゆうべは君たちもびっくりしたろう。こっちは生きてるのに、神さま扱いされる。ずっとなんだ。もう慣れた」

伍長は胸に揺れる人形にそっと触れた。まだ二つの人形が下がっている。

「これは、呪いだと思ってる」

ぼくは聞きまちがえたと思った。聞き返す間もなく、伍長は続けた。

「基地のまわりの挺身隊の女学生たちがね、作ってくれたんだ。特攻の成功を祈ってね。ひと針、ひと針」

ぼくとカミはカミの手の中の人形を見た。縫い目は見えないほどに細かった。目と口は墨で描かれている。

「成功って、死ねっていうこと。死ねという呪いなんだよ。こわかったよ。ぼくたちが通ると、女学生たちが近づいてきてはね、手渡してくれる。みんな花のようにきれいな顔をしてね。みんなわらっていたなあ」

日の丸の鉢巻きをしたおさげ髪の人形は、たしかにわらっていた。

「彼女たちだけじゃない。みんなね、成功を祈ってくれる。上官も、整備兵も、取材に来た新聞記者も、みんな。ぼくが本当に神になれるように。死んで神になれるように」

*挺身隊……戦争中に編成された勤労奉仕団体。若い女性が多かった。

19	受験番号
中	

国語 その五（八枚のうち）

伍長は海をみつめてつぶやいた。

「本当に、みんな、きれいだったなあ」

カミは手の中でわらう人形を見下ろしたまま、どうしたらいいかわからず、固まっていた。

「ごめんごめん」

伍長はカミの様子に気づいて、その手から人形を取りあげた。

「やっぱりあげられないよ。これはぼくへの呪いだから」

伍長はまた人形を胸に下げた。

カミはほっとため息をついて、からっぽになった手を砂の中につっこんだ。手を汚してしまったとき、ぼくたちがいつもするように。

「きみたち、靴は？」

伍長は砂の上のぼくたちのつま先を見て言った。さつきウム畑の中に入ったから、指の間に湿った泥が茶色く残っている。

「みんなはだしだよ。痛くないの」

「痛くないよー」

「戦争だから、靴がなくなったの」

「ちがうよー。もともとみんなはだしだよー」

島では大人も子どもみんなはだしが普通だった。よそへ出かけるときだけ、わら草履を履く。それでも、なるだけ長持ちするように、町までははだしで歩いて行って、町に入るときだけわら草履を履いた。

そういうば、ゆうべうちに来たまわりのシマのおばさんたちは、わら草履を履いていた。島で靴を履いているのは、学校の先生と、守備隊の兵隊さんだけだった。

ぼくとカミは、ぼくたちのはだしの足にはさまれた、伍長の長靴をみつめた。鈍く光る黒い革の長靴。亀岩の兵隊さんが履いていたのと同じ靴。

「伍長さん」

ぼくが声をかけると、伍長はぼくを見た。

「ぼくは、もしいつか、特攻隊の人に会えたら、お礼を言いたいですってずっと思ってたんだ。ぼくたちの島を守ってくれているお礼を」

「お礼？」

「この前、この沖に特攻機が三機落ちたんだ」

ぼくは珊瑚礁のむこうを指さした。

「島の上を飛んできたんだよ。それで南から来たシコルスキー*にみつかって、追いかけられた。そうしたら、どの飛行機も沖へ飛んで行って、撃墜された。ぼくたちが地上にいたから、島に被害を与えないようにしてくれたんだ。だから」

「それはちよつとちがうかもしれない」

伍長はぼくの言葉をさえぎった。

「敵機に発見されたら、海上へ飛んだほうが、敵機には見えにくくなるんだよ。緑色に塗ってある翼が、

*シコルスキー……アメリカの戦闘機。

19	受験番号
中	

国語 その六（八枚のうち）

海の色と重なって見えるからね」

伍長の言葉の意味がわかるまで、ちよつと時間がかかった。なんとかのみこめると、ぼくは続けた。「でも、だって、特攻機はいつも島の上を通らないで、海の上を通っていくよー。もし撃墜されても、島に被害を与えないようにしてくれてるんでしょー。越山の兵隊さんが言ってたって」

「リーダーに捕捉されないよう、低空で飛ぶからね、障害物のない海上のほうが安全なんだよ。もちろん、島に被害を与えたくないというのは事実だけど、不時着する場合は島に降りるしかないしね」

伍長はこともなげに言った。

「そもそもぼくたちはミジクだからね、正直言つて、そんな余裕はないんだよ。みんな晴れた日にしか飛べないし、ぼくは今回の出撃が初めての長距離飛行だった」

そういえば、特攻機は、晴れた日にしか飛んでこない。

神さまは島を守っていたわけじゃなかった。

「最初で、それで最後の長距離飛行になるはずだったのに」

伍長は珊瑚礁のむこうを見た。

「ぼくはこんなところで生きている」

伍長はそうつぶやくと、ぼくたちをかわるがわる見た。

「ごめんよ。ぼくがすみませんって謝ってたのは、芋畑を荒らしたことじゃないんだ」

ぼくは、雨戸の上でうめいていた伍長の姿を思い出した。

「貴重な飛行機を失つて、ぼくだけ生き残ってしまった」

伍長はまた海を見た。

「昨日、一緒に出撃したみんなは沖繩に辿りついて突入している。ぼくも昨日、みんなと一緒に死ぬはずだったのに。死んで神になるはずだったのに」

伍長は叫ぶようにそう言うのと、頭を抱えた。

胸で人形が大きく揺れた。

ぼくたちも黙りこんだ。

波の音と鳥の鳴き声が沈黙を埋めていく。

「ここにいれば？」

カミがぼつりと言った。伍長ははつと顔を上げた。

「もうヤマトウに戻らないで、ずっとここにいれば？ 戦争が終わるまで隠れていれば？」

思いきった言葉に、ぼくはまじまじとカミを見た。カミを見る伍長の顔はわからない。

いきなり伍長はわらいだした。

「きみはお母さんにそっくりだね。きつときみはいいお母さんになるよ」

わらって、わらって、目尻から流れた涙を拭った。

「生きててよかった」

わらいながら、そうつぶやいた伍長は、もう、神さまじゃなかった。

19	受験番号
中	

国語 その七（八枚のうち）

問一 ①「おまえたちは三万円の棺桶かんだけで葬ほうむられるんだからありがたく思え」とあるが、「三万円の棺桶かんだけ」とは何を指していますか。

②上官かみはどうして「棺桶かんだけ」という言葉をつかっているのですか。

問二 「まるで自分に言いきかせているようだった」とあるが、「カミのあまおかあさん」が「自分に言いきかせている」のはどうしてですか。

問三 「戦争だから、しかたがないよ」。アガリヌヤ（東の家）のおじいさんも許してくれるよ」とあるが、「ぼく」はどんなことを「しかたがない」と思っていますか。

19	受験番号
中	

国語 その八（八枚のうち）

問四 「これは、呪いだと思ってる」とあるが、それはどうしてですか。

問五 「伍長の言葉の意味がわかるまで、ちょっと時間がかかった」とあるが、「伍長の言葉」によって、「ぼく」はどのようなことがわかったのですか。

問六 「わらいながら、そうつぶやいた伍長は、もう、神さまじゃなかった」とあるが、「ぼく」が思う理由を説明しなさい。

問七 文章中のカタカナを漢字に直しなさい。

タガヤされた	された	む
ヒダネ	かがみ	
オサナク	ミジユク	く